



**(1) 緑友ハーモニー26年度運営体制**

幹事長: 小林 力 (5回生)

幹事楽譜係: 岡真理子 (14回生)

幹事会計係: 清水あつ子 (14回生)1

パートリーダー: 矢島多恵子 (ソプラノ)、佐藤睦子 (アルト)

河野通久 (テナー)、上田昌紀 (バス)

**(2) 今後の練習日程**

1月16日 (金)	13:00 ~ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
1月16日 (金)	15:30 ~ 16:30	ミニ総会: 中央町社会教育館・102号研修室
1月23日 (金)	10:00 ~ 12:00	緑ヶ丘文化会館・レクホール (本館3階)
2月20日 (金)	13:00 ~ 15:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室 (別館2階)
2月20日 (金)	15:30 ~ 16:30	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室 (別館2階)
2月27日 (金)	10:00 ~ 12:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室 (別館2階)

<u>3月6日(金)</u>	10:00 ~ 12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
3月13日(金)	13:00 ~ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
<u>4月17日(金)</u>	13:00 ~ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
4月24日(金)	10:00 ~ 12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
5月8日(金)	10:00 ~ 12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
5月22日(金)	13:00 ~ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
6月12日(金)	10:00 ~ 12:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室(別館2階)
<u>6月19日(金)</u>	13:00 ~ 15:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室(別館2階)
7月10日(金)		
7月24日(金)		
8月14日(金)	お盆休み	
8月28日(金)		
9月11日(金)		
<u>9月18日(金)</u>		
10月9日(金)		
<u>10月16日(金)</u>		
<u>10月30日(金)</u>		
<u>11月6日(金)</u>		
11月13日(金)		
<u>11月20日(金)</u>		
11月27日(金)	午後	コンサート 小山台会館3階大ホール
12月4日(金)	11:30 ~ 14:00	コンサート打ち上げ/クリスマス会 奥沢 NaKaMa

註1: 表中下線の日は奇数週金曜日です。ご注意ください。

註2: 6月は以前メールでお伝えした第4金曜日が第3金曜に変わっています。

註3: 今年もコンサートを小山台会館で開催します。

註4: 10月、11月はコンサートに備えて月3回の練習になります。

註5: 今年のクリスマス会はコンサートの打ち上げを兼ねて12月第1金曜日に奥沢のイタリアン・レストラン NaKaMa で開催します。

### (3) ミニ総会

2026年2月20日は練習後ミニ総会を開催しました。議題は、1) 練習日の変則日程について、2) コンサートについて、幅広くみなさんの意見を聞きました。そして別途先生方と幹事が変則日程について話し合う場が設けられ、お互いの理解が深まりました。

### (4) コンサートとクリスマス会

今年もコンサートを開催します。日時は11月27日午後、会場は昨年ミニコンサートを開催した小山台会館3階大ホールです。曲目の中ではヴィヴァルディの見た日本の四季が目玉で、ヴァイオリン奏者も加わってくださるそうです。

クリスマス会はコンサートの打ち上げを兼ねて、通常より1週間早めて12月の第1金曜日4日に奥沢のイタリアン・レストラン NaKaMa で開催します。

### (5) 新しい歌

ミニコンサートが終わり、今年から新しい歌の練習が始まると思います。前回から新しい歌を導入するプロセスをが決められました。それは、ハーモニーのメンバーが歌いたい曲名を提出して、高島先生にお伝えし、先生が独自にお選びになった曲と合わせて、最終決定は先生にお任せする、というものです。ちなみに、ミニコンサートで歌った「美しく青きドナウ」はハーモニーのメンバーが希望した曲です。今回もそのプロセスを導入します。これまでに希望曲を提出されたのは住山さんと矢島さんだけです。他の方も奮ってご推奨ください。できるだけ早く歌いたい曲名をメールで小林までご提出ください。

### (6) 3月号のひまつぶし

ベルリン・フィルの7人のヴィルトゥオーゾたち

小林 力

3月1日つまりつい昨日のことだが、ベルリン・フィルハーモニーの7人のヴィルトゥオーゾたちによるコンサートをミュンヘン・ザクセンホールへ聴きに行った。今回はチケットを買うのが出遅れて、買えたのは舞台の左手2階から舞台の斜め後ろを見下ろすような席。こんな悪い席は初めてだが、大相撲ではないが「満員御礼」と書かれた垂れ幕がホールの入り口に掲げら

れているほどの盛況だから仕方がない。だが、2階席というのは舞台を中心にすり鉢状に配置されており、舞台斜め後方の席でも音響効果的には正面の2階席とそう変わらないはずで、実際音響効果には満足した。

さてまず最初に7人のヴィルトゥオーゾの紹介をしておこう。第1ヴァイオリンが榎本大進。彼は言わずと知れたベルリン・フィルの第一コンサート・マスターだ。第2ヴァイオリンはロマーノ・トマシーニで、1989年にベルリン・フィルの団員になった超ベテランだ。ヴィオラはアミハイ・グロスでヴィオラの首席。チェロはクリストフ・イゲルブリンクといい、やはり1989年からベルリン・フィルの団員を務め、昨年9月に引退した老練だ。コントラバスはエスコ・ライネ首席、クラリネットがソロ・クラリネットィストのヴェンツェル・フックス、7人目がシュテファン・シュヴァイゲルトでファゴットの首席、という具合で、錚々たるヴィルトゥオーゾたちである。

日本が世界に誇るヴァイオリニスト榎本大進については経歴をもう少し詳しく見てみよう。榎本大進は父親の仕事の関係で1979年イギリスのロンドンで生まれ、3歳からヴァイオリンをはじめた。父の転勤によりニューヨークへ移り、7歳の時にジュリアード音楽院のプレカレッジに入学、11歳の時にドイツのリューベック音楽大学に特待生として招かれ、同年第4回・バッハ・ジュニア音楽コンクールで第1位を獲得した。1991年以降数々の国際コンクールで優賞、例えば1996年の国際コンクール、フリッツ・クライスラー、ロン＝ティボーで1位を獲得、その他5つの権威ある国際コンクールで全て優勝している。そして、2010年31歳の若さでベルリン・フィルの第1コンサートマスターに抜擢された逸材なのだ。傍ら、兵庫県で「ル・ポン国際音楽祭～赤穂・姫路」の音楽監督を務めている47歳の俊英である。使用楽器は、株式会社クリスコから貸与された1744年製ガアルネリ・デル・ジェス「ド・ペリオ」である。これはガアルネリが最晩年に製作し、ヴァイオリニスト「ド・ペリオ」が所有していた歴史上極めて稀少かつ重要な名器である。

さて、曲目は、前半が、ベートーヴェン:クラリネットとファゴットのための二重奏曲 第3番 変ロ長調 WoO 27-3、同じくベートーヴェン:弦楽三重奏曲ハ短調 Op.9-3、ドヴォルザーク:弦楽五重奏のためのノクターン 変ロ長調 Op.40、後半が、ルーセン:ファゴットとコントラバスのための二重奏曲 (1925年)とブラームス:クラリネット五重奏曲 変ロ短調 Op.115。

まずベートーヴェンのクラリネットとファゴットのための二重奏曲 第3番だが、クラリネットの滑らかな音色とファゴットのいわば渋いが温かみのあ

る響きとが結構よく調和している。2楽章からなるこの曲の第1楽章後半のクラリネットの抒情が美しい。

ベートーヴェンの弦楽三重奏曲の聴かせどころは榎本大進のヴァイオリンである。これがベルリン・フィルの第一コンサート・マスターの音なのだろう。ベルリン・フィルは管も弦も圧倒的に美しいが、特に弦の響きは定評通り、実に美しい。ハ短調はベートーヴェンの交響曲第5番にも使われており、重厚で悲劇的且つ情熱的雰囲気醸し出す。4楽章からなるこの三重奏曲だとそのエッセンスが鮮明になる気がする。

ドヴォルザークの弦楽五重奏曲のためのノクターンは、冒頭、チェロとコントラバスが重々しく主題を提示したあと、コントラバスはピチカートに専念し、弦が四重奏で主題を展開していく。最後はチェロとコントラバスがピチカートでオブリガートとなり、三弦で静かに幕を閉じる。メロディーの名手ドヴォルザークだけあって美しい夜想曲に包まれたような感慨に導く。

ルーセルの二重奏曲は、ファゴットとコントラバスという、それぞれ木管と弦で最低音を担う楽器の斬新な組み合わせで、20世紀(1925年)の作とは思えない古典的な趣きをもっている美しい小品である。

さて、プログラムの最後を飾ったのは本コンサートの目玉 ブラームスのクラリネット五重奏曲である。私はこの曲には大変な思い出がある。高校1年の時、モノラルのLP版でこの曲と出会い、クラリネットとブラームスにのめり込んだ。その版のクラリネット奏者は今や伝説的ともいえる名手レオポルド・ウラッハだった。この曲を通じてブラームスのクラリネット曲、三重奏曲、ソナタへと進み、さらにはブラームスの哀愁に取り憑かれ、交響曲、ヴァイオリン協奏曲、ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲、弦楽六重奏曲などを聴き漁った。

この曲を契機に、モーツァルトのクラリネット五重奏曲、クラリネット協奏曲に出会い、モーツァルトにもものめり込み、ピアノ協奏曲、ピアノ・ソナタ、交響曲、弦楽五重奏曲、ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲、なども聴き漁った。今でもこの2人は私が最も好きな作曲家だ。

ブラームスもモーツァルトもクラリネット曲を最晩年に作曲している事実は興味深い。名曲の影に名手ありと言われるとおり、モーツァルトはクラリネットの名手アントン・シュタッドラーのために、ブラームスはリヒャルト・ミュールフェルトのために書き上げた。モーツァルトはレクイエムを完成させずに亡くなるが、クラリネット協奏曲(K.622)はレクイエムに取り掛かる直前に書かれたものだ。ブラームスは作曲意欲が衰えかけた時にミュール

フェルトに触発されてクラリネット五重奏曲、三重奏曲を書き、2つのクラリネット・ソナタ(Op.120-1, 120-2)が絶筆となった。思うに、モーツァルトもブラームスも最晩年になってクラリネットという楽器の、魂を天に昇らせるような音色の美しさと温かさに魅了されたに違いない。

ちなみに、音楽評論家の宇野功芳(2019年没)は「モーツァルトのクラリネット協奏曲は比類のない傑作で、その後誰もこれに匹敵する曲を書いていない。五重奏曲に関してはその後ブラームスが匹敵する名曲を書いた。」という意味のことを言っている。いずれにしてもこれらのクラリネット曲は管楽器を使った曲の中だけでなく、あらゆる器楽曲の中で燦然と輝いている傑作中の傑作なのである。

話をコンサートの最後を飾ったクラリネット五重奏曲に戻そう。4楽章から成るこの曲全ての楽章で哀愁と諦観の中に見出す安らぎが感じられる。第2楽章の緩徐楽章の美しさは筆舌に尽くし難い。クラリネットと弦の掛け合いに続いて、クラリネットがアリア的になるときに優雅になるときに澄みきった叙情をたたえ、さらには悲愴な抑揚も交えて装飾音型をつないでいき、名実ともにこの楽章の独奏楽器たるクラリネットのヴィルトゥオーゾならではの音色は聴く者の心を蕩けさせる。ヴェンツェル・フックスは名手カール・ライスターのあとを継いでベルリン・フィルのソロ・クラリネット奏者に抜擢されたが、さすがはベルリン・フィルの首席である。樫本大進に導かれる弦楽四重奏との呼吸もぴたりと合っている。涙が出るほど感動した。この曲を聴いただけでこのコンサートに来た甲斐があったというものだ。